
ブリーフマンではなくブルースマンに俺はなりたい

チャオズ丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブリーフマンではなくブルースマンに俺はなりたい

【Zコード】

N7747L

【作者名】

チャオズ丸

【あらすじ】

音楽の夢を追う青年のお話。様々な試練を乗り越え成長していく青年が、憧れのブルースマンになる夢を叶える過程を書いていきます。

俺は22歳学生。周囲は就職のことばかり気にしてこるので、「時世で、俺だけはみんなと違った。なぜなら俺には夢があるから……。」

『夢』、そう俺はアメリカンドリームを追い求めてやまない夢追い人——Japanなんだ。おかげで年下の彼女にも呆れられ捨てられそうなくらいモテて困っている。モテるって罪だね！

さて、俺の夢は偉大なブルースマンになること。3ヶ月前に誰かから借りたCDがきっかけだった。P·P·キングというアーティストの作品で、彼のスリルイズバーンという曲を聴いた瞬間、俺の身体に100万ボルトの電流が流れたのをよく憶えている。あれは凄かった。こんな音楽反則だろって6回は言つたのはよく憶えていないが、とにかく衝撃的音楽体験だつたんだ。

だつてそつだろ？あの曲が流れた瞬間、部屋の空気が変わったんだから！……どう変わったかはとても言葉では言い表せないけど、でも嘘じやないんだ、信じてくれ！その、なんていうか、凄く怪しげな風が俺を優しくも激しく包み込んで、汗ばむ俺を快楽の絶頂へと誘うみたいな……。そんなとてつもない何かが俺を襲つたんだ。

日本でそれまで大した苦労もせず生きてきた俺に、暮らししが豊かすぎて逆に貧しい感性しかなかつた俺にその音楽は本物の何かを与えてくれた。これにはもう降参するしかなかつたね。俺はパンクロックとかのCDを円盤投げの選手みたいに窓から投げ捨てた。あつ、某アイドルのCDは捨てなかつた！これは命でありかけがえのない存在だからです。

というわけで、俺はブルースを歌うことにしてしたんだ。そこで、

オリジナルの曲を創ることにした。俺もアーティストになるわけだし、作曲税とかもあるしな。

ギターに関しては中学からロックとかパンクバンドをやっていたから、そこそこの腕前ではあった。大学でもジャズ研とか入ってたし、まあジャズは弾けないけどね！エーマイナーとかハネ氣味に弾いてりやもう極上のブルースだろって思うしな。

問題は声である。P・P・キングみたいに悲しみと荒々しさと喜びと纖細さを内包した声なんて俺にはなかつたのだから。でも、とりあえずそこは頑張るよとした。

そして3ヶ月の月日を経て、待望のオリジナル曲が完成した。俺は無職になつて毎日暇でも楽しみたいことを誇らしげに宣言する『アイムフリー エブリデイ』、最近食費も出してもらつて申し訳ない彼女へ感謝の気持ちを溢れんばかりに歌つた『サンキュー』、就活をしないことを心配して毎日泣いている母親に向けた優しいメッセージソング『ドンビーアフレイド』などなど、珠玉の名曲たちが誕生したのだった。

よし、じゃあ行くかと俺は搖るぎない自信を胸にヨーヨー木公園へと向かつた。この腐りきつた現代をブルースの力で浄化するため、弾き語りをするのだ。そうすればきっと、多くの悩める現代人を救うことが出来るつて、その時の俺は確信していたんだ……。

路上ライブ

ガタゴト電車に揺られ、そしてテクテクと歩いた俺は、ようやくヨーヨー木公園に辿り着いた。ヨーヨー木公園とはその名の通り、ヨーヨーが巻きついてる木の多かつたことから名づけられたそうだ。偉い人って少し変わってる気がするなあ。

とにかく、いい場所ないかなーと俺は弾き語り場所を探していた。んー、よし、この辺りは微妙なパフォーマーたちを観てる客もいるしここでやろう。俺は愛用のギター『マグワイア』をケースから出して弾く準備に入った。

うん、チューニングも完璧だしギターの音も相変わらず最高だ。とくに低音弦の音の重厚さといったらもう…さすが俺の相棒、マグワイアだな。音がね、もうエロいとしか言い様がないんだよ、まつたく。

と、準備が整った俺は自信作、「アイムフリー エブリディ」を披露した。俺は自由だ、俺は無職だ、そして毎日暇だけどそれでも最高なんだ！俺は解放されて本当に嬉しいんだ～、と大声で叫び散らかした。

すると信じられないことに、数多の音楽の神様が俺の目の前に現れたんだ。ああ、ジョン・ジヨン・ヘン、うわ、ミックにキース、う、嘘だろ？！P・P・キング様までご降臨ですかあ？これは汚顔の至りでござります〜〜。

そう、まさに天国への階段を昇るうとしてカタルシス全開の俺に、突然、リアルが邪魔をしたんだ。

「うわ～、この人飛んじゃってるよ～」
「！？」

気付くとそこには黒髪の少女が立っていた。顔は普通だがすらりと伸びた脚線美が高得点を叩き出しており、なんていうか目に優しかったよ。

「あのセー、キミ独りよがりの歌をやるなら家でやればよくな」「全然響かないっていうか伝わらないよ？」

……あまりの無礼さに俺は愕然とし、体中がガクブルと震え出し、まるで産まれ立ての小鹿のように、立ち上がることもままならなかつた。それでも強引に立ち上がり、ギターを持ったまま女を蹴り飛ばそうとしたら転んでしまつた。

「大丈夫？」

「う、うるさい！お前失礼極まりないだろっ！」

「いや、でも本当のこと言つただけだから」

「……もう少しさあ、言い方つてもんがあるだろ？何気ないその一言で傷付く人だつているつてことを思い知るがいいさ！」

「んー、このくらいで傷付くなら、歌うのやめたほうがいいよ。そんなんじや通用しないから」

「べ、別に傷付いてなんかないし！お、俺は最高のブルースマンになるため、多くの人々を救うために、う、歌う義務があるからつ」とは言つたものの、俺は既に涙目だつた。彼女もそれを知つて、残念そうにばいばいと言つて消えてつた。

完敗だつた。俺のナイーブすぎる心はズタズタに引き裂かれてしまい、それから歌つてはみたものの全く気が乗らなかつた。蚊の鳴くような声で『ドンビーアフレイド（心配しないで）』を歌う俺を、みんなはいたまれない表情で遠くから見守つていた。誰も近づくことが出来ない中、あるおばちゃんが頑張るんだよとつてくれたしわくちゃの5千円札が、なんだか胸に染みたよ。ありがたい、けどもうこれ以上歌えないって、そう思つたらまた泣けてきてさ……。

それから俺は逃げ出したんだ、公園から。

電車に飛び乗って自宅のある川口ハマに帰ろうかと思つたが、やはり彼女に慰めてもらいたい気分になつた弱気な俺は、イケブクロ付近にある彼女の家へ向かつた。

向かう電車の中で、今日のハイライトが脳内にフラッシュバックする。あの綺麗な脚、あの脚のせいで俺はコケにされたんだ。あの脚女には圧倒的な俺の何かで屈服させてやらなくてはなるまいと邪悪な考えで頭が一杯だつた俺。そして無意識に呟く。

「あの脚で俺を踏んで欲しい……」

し、しまつた。つい本音がポロリと出てしまい、周囲のピーポーから変な目で見られている！おまけにこの電車は痴漢が多いことで知られるサイキヨー線だし、かなりまずいことになつたぞ。

俺はカモフラージュのため、顔をキヨロキヨロしてあたかも俺以外の誰かが言つた振りをした。同時に車内に漂つ緊迫感が和らぐのを感じた。

苦肉の策が成功し胸を撫で下ろした俺は、口笛をピー・ピュー吹きながらポケットの携帯に手を伸ばした。その時、紙の感触を感じたのでなんだらうと思いながら手に取つてみた。

それはあの公園でおばちゃんがくれた5千円札だった。おばちゃんの優しさを思い出した俺はまた涙してしまつた。

再び車内の警戒レベルが上がつたが、時既に遅し。イケブクロの次にある田当ての駅に着いたのだった。

電車を降りた俺はフランス人みたいに上を向きながら改札を出た。涙がこぼれないようにな。そして彼女にあと20分で行きます、ていうか今日泊めてくれと歩きながらメールした。

そしたらすぐ、いいけど部屋汚いからもう少し待つてと返つてそのまま向かつた。俺は気にしないから大丈夫だよ、ありがとうと送つてそのまま

で、着いた。変な黄色の2階建てアパートのどつかが彼女の家だ。ドアの前でチャイムを鳴らしどぞくつて声が聞こえたので入った。彼女は同じ大学に通う2つ下の後輩だった。また同じサークルといくつか茶道部の仲間でもあり、彼女とはそこで知り合った。実を言うと俺はジャズをやる音楽サークルを辞めてから入ったので彼女より後に入ったのだが、何も知らない俺に最初に教えてくれたのが彼女だった。その細やかな気配りと清潔感ある風貌に俺はやられてしまい、色々頑張った結果こうなったわけだ。

少し暑い季節ということもあってかほんのり汗をかいていた俺に、氷入りの麦茶だかウーロン茶だかをくれた彼女にありがとうを言いながらゴクゴク飲んだ。

「暑かつたでしょ？」

「うん。汗だくだしもうソコだく、だよ」

「じゃあ、着替えなよ」

うん、と言つて俺は彼女のTシャツを借りた。お互い身長は近いが体重がまるで違うので、俺が着るとなんかもうはちきれんばかりになるが、一応着れるのだった。彼女はそれを見ていつも楽しそうに笑つていたが、俺には何が面白いのかさっぱりだった。

「なんか前より太つたね。痩せれば？」

「ん、ああ。最近酒ばっか飲んでるからね。東くんとかあつはるとかとさ！」

事実であった。同じサークルで気の合う親友東くんとあつはある。彼らとは金さえあれば毎日飲んでいた。ただこの3人が集まると大抵朝までコースになるので、オールは週2回までにしようと協定を結んでいた。だって、大学付近で飲み始めて最終的にはイケブクロの朝8時までやつてるあの店に行くんだもんない。金がどうしようもなく足りなくなるから仕方ないのである。あと、金髪の外国の綺麗なお姉さんがたくさんいる店もってこれ以上はもういいか。

「やうこやや、今日パーパー木公園で歌つてきたんだがビヤ、最悪だつたよ

「なんで？」

「変な女が俺を罵つたんだ！あー、思い出したらまた腹が立つよー。つていうかお腹空いたよ。ミヤギはもういじ飯食べた？」

「まだ食べてない。私もお腹空いた～」

「じゃあ、どうか行こう。金もらったから今日は俺がいじ馳走するし。うんー」と言つたミヤギと俺はワクワクしながら食事に出かけた。

そしたら2人してクルマに轢かれたんだ。

傷心中（後書き）

これからようやく僕なりのコメटァーが始まります。正直、嬉しくてたまりません。

赤黒い血のような液体が煮えたぎる川、死人の顔が積み重なつてできたような岩石、そして大量の生物の骨が砂になつて出来たような白い砂漠。

何時間かはわからない。けれど、どれだけ歩こうがこの景色は変わりそうもなかつた。

「一体全体どういうことなんだぜ？ぜ？」

俺は正直意味がわからなかつた。いいか、今俺に起こつたことをありのままに話すぜってポルナレフとかそんなんどうでもいいくらい困つてもいたんだな。

よし、ちょっと整理してみよう。俺はミヤビと同じ飯を食べに行つた。で、ナカセンドーのあそここの交差点近くの横断歩道を2人で渡つていた。手は繋がない。俺、そういうのは苦手だから。いや、ミヤビがそれで悲しんでるつてのは知つてる。女友達に相談してのも実は知つてる。それ以外にもっと深刻な相談してのも悲しいけど知つてる。でもさあ、いや整理を続けよう。並んで歩いてた俺たちに信号無視の白いワゴンみたいな車が猛スピードで……。突っ込んだよくな？？

あれ、ということは俺、もしかして死んでる！？いやいや、それヨウミヤビはどうなつたんだ？誰かおひえでーーーーー！ミヤビイイイ

—————

俺はこの暑苦しい場所、そう地獄で叫び続けた。人生で初めて俺を受け入れてくれた他人であり異性である人の名を。俺みたいな変わり者で素直じゃなくてプレゼントもしないし手も恥ずかしくて繋げないけど、それでもそんな俺を好きでいてくれた最愛の女性ミヤビの名を精一杯叫び続けた。

……気が付けば喉が潰れて声も出なくなっていたが、そんなのどうでもいい。生きてるんだろ、ミヤビ。早く顔を見させてくれ。あの変顔で俺を愉しませてくれよ、ミヤビ……。

大げさかもしれないが、もう生きてく意味がわからなくなりつつあつた俺の前に突然、巨大な黒い何かが現れた。何かつて？絶望した人間の前に唐突に現れておまけに救つてくれる存在なんて、大昔から相場は決まってるじゃないか。

そう、そこには神がいたんだ。

神と俺

俺の前に突如現れた黒い豚のような人間、それはなんとあのブルースの帝王P・P・キングなのであつた！そして彼はおもむろに言葉を発した。

「やあ、元気ビンビンかな？」

……ああ、神は確かにそう言つたんだ、俺に向かつて。いいかい、今俺の目の前には黒くて大きくて極太の神P・P・キングがいて、ものすごいアホくさいことぬかしてるんだよ…ちょっと本人確認してみようか？

「え、あなた、キングさんですよね？あの、アーティストの……」「ん、そうだよ。私はアーティストのキングだ！スリルイズバーンとか歌つてるかも」

「す、すげえ！俺、あなたに憧れて音楽やつてるんですよ…！あなたのようなブルースマンになるために！」

「ギャハハ、マジで？それは素晴らしいことだね。つまり最高にビンビンってわけだ」

「いや、ビンビンの意味がよくわからないんですけどでも、ここで会えて本当によかったです！っていうかキングさん、こじりビンなんですか？」

「ん？少年は自分が今どこにいるかもわからないのかい？こりゃまた、傑作ビンビンだねえ～、ンガアーハッハッハアー！！！」

「笑わないでくださいよ、キングさん。俺、なんだか混乱してつて、あれれ、もしかしてこれ夢？そうか、これは夢だ！そうだよ、俺とミヤビが死んだのも、こんな変な世界にいるのも、キングさん

に会つたのも全部夢なんだ。そう考えればすべていい感じだぞ」

そう考えた俺はなんだかホッとして。よかつた、さあ早く起きて愛すべき日常に戻ろうと考えていると……。

「残念だけど少年。君は間違なく死んでるよ。だつてここ地獄だから」

キングの言葉に驚いた俺は鬼の形相で振り返る。嘘だと言つて欲しかつたから。

「そんなかわいい顔するな、少年。私がビンビンに興奮してしまいかねないぞ？」

俺の太ももが彼の小指つてくらい体格の違う人を興奮させたくない俺は普通に戻つた。

「ふう。少しだけ時間をくれないか？気を鎮めたいから」

「待たせて悪かったね。さて、じゃあ帰るつかな」

「待つてくださいよ！俺が死んでるつてどうこいつとか説明してくれださい！」

「ん、ああ、別に構わんよ。だがそれは次回だ！いいねつ。」

「わかりましたっ！」

神と俺（後書き）

スピッツの若葉と椿屋四重奏の幻想を聞きながら今回書きました。
久し振りに書いたので正直あれかもしませんね。

そして時は流れ

キングから俺が死んだことを聞かされた俺はそれを受け入れた。そして地獄で実に20年もの修行を積み、ブルース界の多くの偉人達とのセッションバトルに明け暮れていた。今ではロバート・ジャクソンやブルーベリーと言った大御所からも一目置かれる存在にまでなったんだ。

その最大の要因は和とブルースの融合に成功したことだった。俺の音楽には日本人にしかわからない痛みや苦しみがあり、これが彼らの琴線に触れたのだ。

……だが、正直そんなことどうでもよかつたんだ。最愛の人をなくした悲しみ。何も、あれほど熱中した音楽ですら俺を救つてはくれない現実。絶望。絶望。ただ絶望。

内心ではそう思いながら、楽しんでる振りをして音楽をプレイすることへの罪悪感。ああ、人間とは何なのだ。人間とは、人間とは。いや、そもそも俺とは? 何をして楽しみ何をされて喜び怒るのかも忘れてしまった。

でも、結果的に俺はわかつたことがある。孤独と悲しみと音楽と歌の組み合わせは最良であつた。いつの時代もそれは美しいのだ。そして多くの人を救うだろう。しかし俺の心は? 誰が癒してくれるというのか、という問題を抱えたまま今もあの世で歌い続けている。

そして時は流れ（後書き）

日々の生活が忙しく全く更新できませんでしたが、とりあえずこの話はここまでとします。次回は全く違う作品を書けたらいいなあと思います。もし読んでくれた人がいましたら嬉しい限りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7747/>

ブリーフマンではなくブルースマンに俺はなりたい

2011年2月3日23時41分発行